

肥後の医学教育と村井家

浜田善利

はじめに

肥後の医学教育は、熊本藩の再春館で行われた。そして明治になって、西洋医学が入るとともに幾つかの変遷を経て、今の熊本大学医学部となった。再春館は宝暦六年（一七五六）、時の藩主細川重賢のとき、創立されたものである。

重賢は細川家第八代の藩主にあたり、思い切った人材の登用と政策の実施で、当時疲弊しきっていた藩を見事に立て直し、紀伊の徳川治貞とともに「紀州に麒麟、肥後に鳳凰」と並び称された。熊本では重賢の業績を「宝暦の改革」と呼び、重賢を霊感公と尊称している。この重賢の文教政策の一つが、宝暦五年（一七五五）の藩校の時習館の設立であり、続いて翌年の医学校再春館の創立であった。これは江戸に躋寿館が設立された明和二年（一七六五）よりも九年前にあたる。

躋寿館は『年表日本博物学史』に次のように記されている。

明和二年四月一〇日、多紀元孝、医学校の設立を幕府に請願、五月九日私学創立を許可される。よって、江戸外神田佐久間町の司天台（天文台）の趾地一五一八坪を貸与され、医学館を開き、名づけて躋寿館という。

また『日本文化総合年表』には、同年十二月四日諸医が躋寿館で学ぶことを許可するとある。

肥後にもこれに関連した資料がある。それは明和三年（一七六六）正月二十四日の『肥後藩庁機密間日記』（『肥後医育史』に収録）に、当日の当番家老長岡少進が記した一条で、

大目附え

奥医師 多紀安元

医学館 神田佐久間町

右安元儀此度相願右之場所に而医道致講釈候御医師之子弟並陪臣医師町医師惣而医道志之輩右学館え罷越候儀勝手次第之事

右之趣寄々可相達候

松平右近将監様被成御渡候御書付写迄通大目附中様より被指廻候に付右御書付之趣夫々可申聞旨被仰出候段江戸より申来候に付き則右書付写迄通相渡候御医師中に被相渡且又町在医業之者に至る迄不洩様に可相触旨田中柳宅林田元伯え可被申渡候 以上

これを『肥後医育史』の著者山崎正董は次のように評している。

右布達は江戸に於ける医学教育開始の告示である。此の医学館は明和二年五月安元の父元孝が私財を投じて建設し躋寿館と名づけたもので、此の学館は江戸に創設せられ、しかも時の幕府は大に之に好意を寄せて其の建設のことを諸藩に知らしめるのみならず後には学館維持のために諸医師より年々寄附銀を差出さしめたる程だから、日本医育史上画期的の一大事実で、我国に於ける組織的医学教育の元祖のやうに思はれて居るが實際は再春館の開始より後れること正に九年だ。

このように肥後の熊本において、我国で先駆的な医学学校の創立に携わり、実際に再春館を発足、運営し、経営を軌道に乗せたのが、熊本府で医を開業してまだ二代目であり、市井の一医師に過ぎなかった村井見朴である。

以来、村井家では代々医師を継ぎ、再春館に勤めて、肥後の医育に大きな貢献をして来た。本論文ではその村井家の歴代の事績をたどり、側面から江戸時代の肥後の医学教育を見ることにする。

一、村井家

村井家が熊本のに地に医業を起こしたのは、見朴の先代の知安のときである。その祖については、『諸家先祖附』（『肥後先哲偉蹟』巻一に収録）に次のようにある。

一先祖菊池家嫡流にて、二十五代菊池武包に至、屋形断絶、肥前国に出奔仕、其後播州林田村に蟄居、子兩人ござ候、長男菊池武平儀、戦死仕候、二男林田村にて出生仕候故、林田左京亮と申候、大永元年御国へ罷帰、託麻郡木部村にて、二千石余を領地仕、家人多育置申候、木部一村は、家来筋の者にて、其比木部殿と称申候、左京亮子出雲儀、天文年中より牢人にて、同木部村に住居仕候処、慶長十一月五月、洪水にて村中及難儀、大塘に小屋掛仕凌居候節、加藤清正様、郡中御巡覽有之、洪水の難無之所見立、住居替候様との事に付、翌年所替仕候、上木部村新屋敷と申伝、村井知安御城下へ引出候節迄、住居仕候、出雲儀は、加藤主計様叔母躰、田寺久太夫躰にてござ候、嫡子林田忠兵衛、其子藤五右衛門、其子十右衛門、其子知安にて候、知安医業仕、古町新々鍛冶町へ住居仕候、妻方の氏村井に相改申候

友安は諱が能敦、字が友安、容膝軒と号した。肥後の医家村井家の初代である。友安は能次（左京亮）の六世の子孫にあたり、長松見栢の養子となつて、妻の姓を継いだ。友安は肥後の原田宗意について医術を学び、のちに熊本に出て、古町新鍛冶屋町に居を定めて、医業を開いた。

なお知安が医術を学んだ原田宗意については、『肥後人名辞書』に
医を以て細川侯に仕へ、其名噴々たり。子孫皆医を以て名あり。元禄十二年九月十五日歿す。
とある。

友安の長男で、その後を継いだのが見朴である。

二、村井見朴

見朴は友安の長男として、元禄十五年（一七〇二）四月十三日に生まれた。村井家の第二代であり、名が朴、諱は見朴、字は醇民、復陽洞真人と号した。

幼より穎悟、やや長じて群書を読み、天文、算数、律曆等皆通ぜざるなしといわれ、儒医をもって細川家に仕えた。享保年間（一七一六～一七三五）の終わり頃と考えられるが、私塾復陽洞をひらき、多くの医学生を養成した。

また医術の上では、西海道巡見副使夏目氏の治療に薩摩まで出向いたり、藩侯の病を診たり、数々の顕著な治病の業績をあげたが、五十歳のとき眼病を患ってついに失明した。見朴の嫡子である村井琴山は『先考復陽洞先生邸井府君行状』（『肥後医育史』に収録）に、見朴の失明の様子を次のように記している。

宝曆元年辛未八月、先考患眼、暴赤腫疼、苦楚不可言也、然走診、無敢所闕焉、遂至喪其明

見朴は失明した後の宝曆六年（一七五〇）十二月二十七日に、第八代藩主重賢の命を受けて、二本木町角井に医学校の再春館を創立、翌七年正月十九日に開講、見朴は師役（教授）として、開講の辞を述べ、盲目ながら続いて『素問』の第一篇を自ら講じた。琴山はこれを次のように記す。

六年丙子十有二月二十七日、以先考老且喪明、拜命于家、擢為再春館医学教授、歲賜俸金若干、七年丁丑正月、医学告成、十九日先考開館、講素問上古天真論、暗誦講說、其弁如流、講終告礼成、賜宴于外堂

藩の医学校が再春館と命名されたことに關して、琴山はこう記している。

初先考、夢有一真人、大書再春二字、以賚先考、先考拜而承之、夢覺、召小子、語其狀曰、再春二字、汝以為何、小子未知焉、先考曰、再春者回春也、夫医之治疾、使元々同躋壽域者、尚万物再被春風煦煦之和也、是我医教之興矣乎

哉、小子識焉

こういう経緯があつて、学校ができたとき、重賢の下命を受けて再春の名を上申し、採用されて、正式に医学校の呼称となつた。

見朴は宝暦十年（一七六〇）九月病を得て再春館教授を辞し、十一月十三日に没した。

見朴の人となりと業績を、友人であり、かつ藩校の時習館の教授であつた秋山玉山は、次のように墓碑銘に述べている。なおこの墓碑銘は、現在も見朴の墓石の三面に残っているが、ここでは『肥後先哲偉蹟』巻一より引用する。

邨井君見朴碑銘

邨井君、諱見朴、字醇民、自号復陽洞真人、本姓林田氏、肥後守菊池寂阿公十三世之裔也、事具家牒、曾祖諱能長、祖諱能道、考諱能敦、字知安、号容膝軒先生、妣江氏、君以元禄十五年壬午夏四月十有三日生、生十一歳言詩、稍長読群書、旁至天文算数律曆、莫不通曉、從固菴藤先生、竹堂熊先生、慎菴鋌先生遊、与墨君徽、水斯立、加仲精、岡士騏友善、皆博強知名之士、君日夜切劘、上下其論、得失相易、故特濯濯也、君業医、然惡世方伎家專重糴、奮然独以仁術自任、趨病家、尊卑一視、不為低昂、人聞其履声、即有起色、所全治不可勝数、延享三年丙寅八月、西海道巡檢副使夏目公、至薩州疾、隣国礼当使医員往診問焉、適乏其人、官使君代其職行、往来踰月、莫有敢事、勞以白金、寬延三年庚午、今公即位、公有疾、召見問治、應對得宜、公亦尋愈、賜歳時之拜、於是乎、君之医名大噪于遠近矣、君至性敦厚、不事華飾、文如其人、行如其言、聞人之善、喜躍不任、嘗錄邦内孝名聞于官者先後若干人為伝、名曰孝子紀事、以山鹿郡孫二郎為首、重其錫類也、書成、錄上、公覽而蹉賞久之、乃托之松山源公子、及大医令西岡橋公、而賜之序、於是乎、君之文名籍々乎縉紳之間矣、榮不亦華衰乎、宝暦五年乙亥春、我公新興国学、曰時習館、館之左右、置武学、東曰東樹、西曰西樹、凡国之絃歌校芸之士、皆造焉、邦内靡然嚮風、公曰、文武之学備矣、唯未有医学、其如我赤子夭札何、六年丙子冬、叔再春館於角井、十二月二十七日、有司擢君為医学博士、先是、君既喪明、故得拜命於家、自是廩人

給粟、輜夫從之于館、優老者也、君則日夕究思、議定科条、以誘進諸生、敞和並至、館中肅然、從誨三年、入館者三百
有余人、医道大明於国、而民皆免於為庸手刃腸胃、於戲我、公之仁斯民也、既已乳哺之、又從而噢咻之、則使斯民之熙
熙若陽春同躋壽域者、君蓋与有力焉、豈不謂功等良相矣哉、後四年、以老且病辭職、不允、先後凡四辭、乃免、尚賜優
給若干、老于家、君自失明後、益精於音、好吹鉄笛、彈琵琶、別構一室、顏曰天際窟、広狹裁容檀槽一面、静夜独坐其
中、弄撥一再行、四弦冷然、与天籟相応、竹月娟娟窺人、其風韻高邁如此、君晚得膈噎之病、不食三數月、惟酒是恃、
余時自東都帰、聞其若是也、則不解裝、載酒往問焉、君則欣然起坐對酌、言笑如平常、徐謂余曰、去來有數、不久酒且
絶、我將為餐霞之人邪、其不以死生介意如此、後數日、聞君病革也、至則既反真矣、実宝曆十年庚辰冬十一月十有三日
也、卜某日、葬於万日山先塋之側、復陽洞之稱、君蓋宿知之矣、年五十有九、著復陽洞集三卷、藏于家、娶坂田氏、生
丈夫子五女二人、男長植、次松、次桂、次桃、次棗、皆有才学、門人受業於家塾者、六十余人、与長子大年胥謀、磨貞
石、乞銘於儀、既成、請盈上人而書之、皆君之石友也、銘曰、其來也偶然、其去也偶然、噫若人兮、舍我而僇邪
また『孤山遺稿』(『肥後先哲偉蹟』卷一に収録)に収める時習館教授籛孤山(名は愨)の「再春館医学教授邨井君壙誌」
は、次のようである。

先生諱見朴、字醇民、一字能章、姓村井氏、始号蛻巖、後自号復陽洞真人、肥後熊本府人、其先菊池氏、其中世嘗処播
之林田、因改姓林田、曾祖考諱能長、字教祐、妣青木氏、祖考諱能道、字道喜、妣倉岡氏、考諱能教、字知安、入贅於
江氏、遂為其嗣、冒姓邨井、邨井即江氏之族也、教世業医、隱而不仕、先生生於元禄十五年四月十三日、幼能詩、長從
固菴佐藤先生、竹堂熊谷先生遊、享保十七年、有華医周某、來客于長崎、官令海内医人得見以議論医事、先生時年二十
余、奮然請行、府不允、延享三年、西海道巡見副使夏目公、至薩而疾、我藩宜使医員診問焉、迺選使先生、先生往護其
疾、數旬而帰、賞勞賜白金若干、寛延三年、台下有疾、召先生診之、遂賜歲時之拜、宝曆元年、先生患眼、遂喪其明、
五年、府命先生輯録藩内孝子之事、六年、再春館成、乃擢先生為再春館医学教授、歲賜俸金若干、七年丁妣江氏之憂、

居喪甚だ感、辭職不許、八年又辭、不許、慰勞歲賜粟米若干、九年又以病請、十年又請、乃許之、賜優給三口、同年十一月十三日疾歿、年五十、葬于城西万日山先塋之側、所著述有復陽洞集三卷、角井学規四編、律原正論一卷、肥後孝子記事四卷、脚氣腫滿証治方一卷、保産食忌一卷、医学六事編六卷、娶坂田氏、生男五人、椿松桂桃棣、椿字大年、為嗣、松字喬年、為宇土侯侍医帆足氏之嗣、桂字芳年、偕有文才、不墜家聲、桃棣尚幼、女二人、長適門人医業選試田中種徳、次未笄、大年將瘞誌石、請文於愨、々於先生有通家之好、受其愛顧、則誼不可固辭、乃謹次世系出処終始梗概如右、秋文学子羽、既許其碑文、則行実之懿、志業之美、行將見之墓表之銘也、愨又何述

見朴はもともと先生の教育に対して、熱心であった。すでに享保のころに家塾を開き、復陽洞（復陽堂と記したものである）と称している。村井家の記録には、宝曆の初までに七十一名の塾生の名が残っている。また『復陽洞物品目』（『肥後医育史』に収録）には二十二種九十三品の薬物が収載されている。

このような見朴であったので、再春館教育の下地は早くから持っていたのである。見朴の再春館における勤務は、次のようであった。

再春館開設時 会約主事および医学教授

宝曆六年十二月〜同十年九月 師役

熊本市万日山の村井家墓地にある見朴の墓石文は正面に

復陽郷井先生之墓

合葬坂田氏 寛政三年辛亥十二月十四日甲寅逝矣

とあり、あとの三面に、秋山玉山の碑銘が刻まれている。

なお村井見朴の著書は『国書総目録』に次のようにあげてある。

『医学六事論』、『脚氣腫滿証治方』、『再春館会約』、『再春館規律』（宝曆七）、『肥後孝子紀事』、『復陽洞集』、『保産食忌』

攷』、『律原正説』

『肥後医育史』にはこのほかに、『角井学規』一冊(写本)がある。また『肥後文献改題』には、上記のほかにさらに『復陽洞歌集』一冊(写本)がある。これらは村井家所蔵の本だったので、『国書総目録』には知られていなかったであろう。なお『保産食忌攷』は、他の文献では『保産食志』とある。

三、再春館の規約

再春館発足のとき、重賢の命を受けた時習館総教の長岡内膳は、三カ条からなる「壁書」を館内に掲示した。その内容(『肥後医育史』に収録)は次のようである。

再春館壁書

一、医の道は岐黄を祖述し、仁術に本づく、故に尊卑を撰ばず、貧富を問はず、謝儀の多少を論ぜず、専本分を守るべき事

一、近世治療を先にし、学業を後にするの輩、仮俗間に信ぜらるゝとも、一旦の僥倖なり、学業を専にして療治の準繩とすべき事

一、師を貴ぶは古の道なり、会寮の諸生温順恭和、教授之誨諭に背かず、紀律の条目にもとるべからず、且經史子集は教を時習館に受くべし、此寮に於ては唯自己の本業を学ぶべき也

右之通可相守也

宝曆七年正月 長 内膳判

再春館の運営に関して、重賢の命を受けて見朴が最も心血を注いで作り上げたものが、「再春館会約」である。この会約に盛り込まれた内容によって、見朴の意図するところが読み取れる。なおこのとき、見朴はすでに失明していたのであるか

ら、この会約は、長男の琴山が、見朴の口授を受けて筆記したものである。それについては、琴山の会約冊定が残されている。

再春館会約（『肥後医育史』に収録）は始めに四カ条の条文があつて、その後に規律、禁止、科目、日課の四項目があり、医学学習の心得が述べられている。

第一条には、

一、諸生須知、官興学蓄書、立師置徒、各教育会輔、以肄已業、而使闔国之民、無夭死札瘥之憂、其惠也渥焉、汝輩欲副我公擴仁之意、則常夙興夜寢、博学審問、全汝業、成汝德也、豈可不竭力乎、謹勿荒怠

とある。

日課には、

一、素問靈樞者、雖曰起戦国秦漢之際、而百世医流之所祖述、不可一日廢焉者也、毎月以九之日、教授先生一人講説于再春館、会説討論、別有課日、難経脈経甲乙経者、診視灸鍼、無所不備焉、併張介賓類経、而循環輪読、終而復始、或諸生以日独看于各寮、張長沙者、方法家之鼻祖、其治雖專在傷寒、而諸症亦雜出、如傷寒論金匱要略二書、医籍中難読之書、無出其右者、不切磋于此、琢磨于彼、則終身無知方法之旨、医生豈可不朝習而夕誦矣、病源候論者、成於隋巢元方氏、而論弁諸症、分析百疾者、詳審矣、物産者、雖專非医生之業、然知藥性者、物産為先、不知藥性、則不熟方法、不熟方法、則不能治病、故物産取於李時珍本草、脈色者、医家大関係也、不可不詳審、故脈色者、取法於叔和時珍二氏、其余諸書者、宜從諸生之所欲、而会講討論、唯要不踰等、以正課程日期

以下各条項がある。そして最後に

右十九条、丙子冬十二月二十有七日、臣見朴奉官命、与臣岩本原理等議定焉、（中略）常夙興夜寢、博学審問、全汝業成汝德也、諸生其勉旃

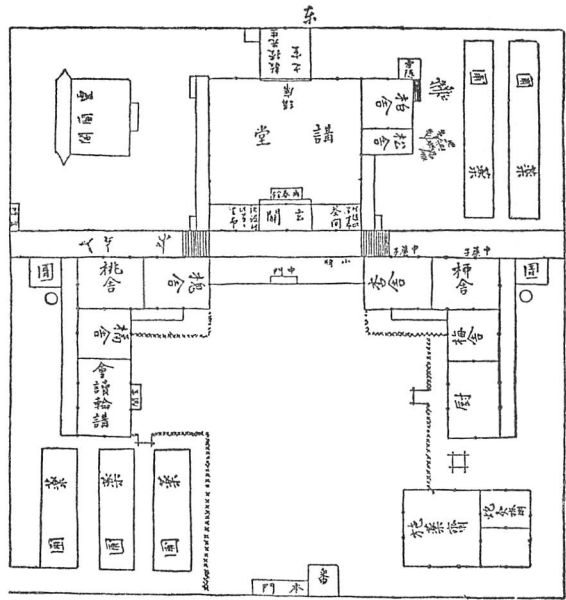


図1 再春館創立当時の校舎図面

として、宝暦七年丁丑正月十九日 再春館医学教授 臣 村
井見朴謹識と結んでいる。

なお再春館の堂上に掲げられたこの会約は、明治三年（一
八七〇）七月、山崎に移っていた再春館が廃校になるとも
に、撤廃された。

創立当時の再春館の見取り図（『肥後医育史』に収録）を図1
に示す。

四、村井琴山

琴山は見朴の長男である。享保十八年（一七三三）七月十
六日に生まれた。名は棟、字は大年、椿寿と称し、琴山と号
した。再春館創立のとき、失明していた見朴を助けて、万事
を取り仕切り、見朴の事業を完成させたのは、蔭にあった長
男の琴山であった。なお琴山については、椿寿の号を使う文献も少なくないが、万日山の村井家墓地にある墓石には「琴
山 柳井先生之墓」とあるので、本論文では琴山に統一しておく。

琴山は再春館においては、講釈方、師役および吟味役を務めたが、長く在職することはなかった。一方、二十七歳で京
都の山脇東洋に教えを乞い、東洋の没後、三十一歳で吉益東洞に師事して古医道を研鑽し、それがかえって、官学と相容
れざる風を生じた。

琴山は寛政十年（一七九八）に、見朴以来の家塾の復陽洞を原診館と改め、新たに原診館七則を立てて塾生の指導に励

み、また善音堂の薬物会を主催するなど、中央の学者との交流も深く、晩年は島崎町に叢桂園を営み、藩内外の文人との交わりも厚かった。

このような琴山を、『肥後人名辞書』は次のように記している。

名は杵、字は大年、椿寿と称し、琴山と号す。見朴の長子なり。古医方を唱へ西藩其風に嚮ふ。稟祿百五十石、再春館医員となり、又侍医を兼ね。蓋し異数なり。著書数十部あり。文化十二年三月朔日没す。年八十三。墓は春日万日山。

『諸家先祖附』（『肥後先哲偉蹟』巻三に収録）には次のようである。

村井椿寿儀、見朴子にて候、宝曆十二年二月、再春館講釈仰付られ、師役申談、教育可仕旨、毎歳米二十俵拝領、同年病氣にて御断、天明六年六月、学業厚、療治手広、出精致候に付、十人扶持拝領寛政二年、寅次様御療治仰付らる、同年十二月、銀十五枚拝領、三年十二月、銀三十枚、四年御療治御断、後免、同年十二月、銀十枚拝領、六年十二月、太守様御伺仰付らる、度々御銀拝領、八年十月、家業學術拔群に有之、門生も多、療治数十年、無怠慢致出精候に付、御擬作百石拝領、外様御医師に召出さる、九年四月、御裏女中療治仰付らる、享和三年二月、瑤台院様、御所勞中、致出精候に付、御紋付縮緬御拾羽織一、白銀七枚、拝領、同年八月、再春館医業吟味副役、富田大淵跡、同年十二月、老衰に付御断、御免、文化元年正月、著述の和方一千方、公儀より差上候様御達に付、夜白出精、骨を折、写方出来、差上候に付、御紋附御小袖一、白銀七枚拝領、五年四月、家業學術精練、及老年候へども、無怠慢、療治方をも出精、且多の門生を教育致、他方にも相聞、無比類候に付、座席御物頭列、七年九月、及老年候へども、彌以無怠慢、療治方出精、不相変多の門生をも、致教育候に付、今迄の御擬作百石、御蔵米の御知行に直下さる、九年十月、再春館御取建の始より、医業致研究五十年余、彌以無怠慢、療治方も致出精、家業拔群に付、御ヒの席に仰付られ、御足高五十石拝領、十一年正月、老衰に付、御裏女中療治御断、御免、同年九月、老衰に付、八十二歳、御知行差上候、同月再春館御取立の御より、父村井見朴を相助、医学致研究、家業拔群に有之、数十年数多の門生を致教育、他邦にも相聞、無比類

候に付別段を以、毎歳御米二十五俵つゝ拝領

琴山の墓誌は、時習館教授の辛島塩井が撰している。『塩井遺稿』（『肥後先哲偉蹟』卷三に収録）によれば、それは次のようである。

琴山先生村井君墓誌

我藩自宝曆中至于今、文化之盛、固莫不由明君賢相在上、与文儒先生相左右于下、而異能之士成一家之名、以簸揚藩内、其最較然著明者、無齋藤氏与村井君若焉、齋藤氏与騎射、而士人遊惰之俗熄、村井君倡医方、而医生弁給之風衰、是其助風化功亦大矣、而齋藤氏死、有隅文盛称其事、村井君继歿、豈亦可湮滅其事乎哉、文化十二年乙亥春三月朔、琴山先生村井君病終、葬于城南万日山先塋之側、其嗣子冠吾、請誌于余、固辞弗可、遂諾焉、因案状、琴山先生名葬、字大年、称椿寿、琴山則其号、復陽洞見朴先生之長子、家世業医、住于熊府、自幼卓犖不羈、蚤從父而学、面貌岸異、巨口厚唇、大有威稜、望之儼然、一見之際、人皆知為其非常人也、宝曆初、藩興医学館、其父教授喪明、先生每扶升講席助執說、又設医科定会約、其規模皆成於先生之手云、其父歿、先生命助講、辞不就、是時洛有東洞吉益翁者、大倡古医方、先生聞之、浮海入洛、遊于其門、留数月受方而歸、數年又遊洛、翁益偉其才、及歸送之下堂、垂涕与訣曰、吾道之寄、自関以西、一以委汝矣、既歸開講筵、教誘後進、都下嚮風、郡邑諸生來聚者、數十百人、先生長講說、又善罵人、其斥非排異、一反其唇、群醜皆靡、始其倡古方也、邦人側目、父戒其子、兄戒其弟、曰是能殺人矣、可恐也、於是人無為請治者、門下肅然、貧窶亦甚、一日食絕、拳家皆病、先生強起、往乞於姻家、踵其門逡巡而反、曰寧填溝壑乎、不仰給於人矣、其介如是、然執志彌確、攻学彌力不有以毀誉貧富少介其心也、迨中年医名日著、施及他邦、遠近請治者益衆、藩少将老公嘗不予、召先生治之、瑤台大夫人不余又如之、又庶公子及老公庶母有疾、皆命療治、恩遇殊渥、賜銀及服者數、藩法非内医、則不許侍診、先生為外員、親侍湯藥、蓋異數也、往年立花侯、竹田侯、亦聘召先生、又屢赴長崎鎮台、及日田代官之招、其他庇鄰邦之請者、不可勝數、藩内及諸邦之医生、來学于其門者數百人、所著數十部、二千年

眼、統藥徵、藥量考、方極刪定、既梓于世、自草稿至于淨写、皆其手筆、其精可見已、嘗著和方一千方、緒余所輯、藏諸篋笥中、事聞江都、台命写一部上焉、賜銀十枚、藩府亦賜服並銀、藩内榮焉、先生性峭直、昂昂不屈、常傲權貴、不為俗士容、故強壯沈滯、及五十有余、賜月俸十口、數年又賜廩祿百石為医員、後班物頭列、年既耄老、請致祿不可、又班亡医、增給五十石、無幾衰老日加、又請、遂允之、歲賜米二十五襄以優老也、翌年病歿、年八十有三、配津田氏、長子名煥稱冠吾、班医員、次子名炳稱玄齋、擢亡医、又其次子名焯稱閏五、襲中根氏後、今為番士組脇、皆其余慶所致也、先生精力超人、至老勉学不減少壯每旦夙起、洒掃室内、焚香端坐、誦聖經教紙、而後啜茗就食、学極該博、至于积書僧法、無所不究、最能詩名于一時、常惡世詩人之為法所局束、豪宕自放、又尚清奇、自称曰詩魔毒公、作歌自述、然每吟哦長篇風生、援筆立成、至其俊逸、則大出於人意表、初幼受業于玉山秋教授之門、与古公諱及吾先人相友善、又与米大夫僧君山、及一時之名士開詩社、常相往来、文人名縉至自他邦、亦皆主先生之家云、旁解音律、嘗遊崎陽、受琴于清人潘渭川者、著琴錄、時披鶴氅戴烏帽、奏南薰一再行、其樂晏如也、又好山水多雅尚、嘗營別墅于西溪之上、茅宇清淨、泉石成趣、茗一爐、琴一張、扁曰琴山小隱、暇日逍遙、或請朋友故旧相与吟哦、大抵以為常、晚年家資豐備、凶書万卷、古器雅玩、支屋滿架、遠方珍異之物、相望輪厨、故常會賓客、清濁不失、最親骨肉、兄弟友于、兒孫列前、酒食供具、每以娛樂、然躬常飽食不多食、疾病遺命、斂用木綿服、不須絹帛、其不忘本有如是者、先歿一日、次子玄齋、以其曠日不愈、軫方進藥、先生嘗之、瞋目而叱曰、爾何遽也、国手之任当不如是矣、氣息喘喘、口言之不已、玄齋為亡医故云

文化十四年丁丑二月 塩井辛島憲謹誌

琴山の再春館における勤務は次のようであつた。

再春館開設時 館内総管

宝曆十二年（一七六二）二月～同年十一月 講釈方

享和三年（一八〇三）二月～同年十二月 師役

享和三年八月～同年十二月 吟味副役

琴山の墓石文には、正面に

琴山邨井先生之墓

裏面に

先生以享保十八年癸丑七月十六日而生以文化十二年乙亥三月朔而没享年八十有三矣

向かって左の側面に

合葬津田氏 天保二年辛卯三月二十八日辛巳逝矣

とある。

琴山の著書は多く、『国書総目録』には『医字解』、『医道二千年眼目編』（文化四刊）、『医方量水率考』、『琴斎詩集』、『琴斎文集』、『琴山遺稿』、『琴山翁著述目録』、『琴山翁文遺』、『琴山詩文集』、『琴山問答書』、『結舌編』（天明元）、『原診館遺稿』、『原診館隨筆』、『古医薬量考』（明和五刊）、『七則解』、『主方考』、『傷寒論講義』（天明二刊）、『傷寒論自序講録』、『診余隨筆』、『診余謾録』、『水気血』、『善音堂薬量考』（明和七）、『動古今』、『痘診要薬方』、『痘瘡問答』（享和三）、『東洞先生家塾方』校（安永九）、『毒薬考』、『読類聚方』、『肥後村井琴山医説』、『分量攷』、『扁鵲伝』、『扁鵲伝年表』、『方極刪定』（明和九）、『本論字談』、『麻疹略説』（享和三）、『万病一毒之論』、『無大熱説』、『村井氏与合志杏菴書翰』、『邨井先生麈尾説』、『村井柁ヨリ中川其徳ニ与フル書』、『薬徴刪定』、『薬徴統編』（安永七）、『熊府薬物会目録』編（宝暦十四）、『論儒医言』（文化七）、『類聚方議』、『類聚方存疑方補遺十一首』、『類聚方補遺存疑方』、『和方一万方』（天明元）があげられている。

このほかに『肥後医育史』には、琴山の著書として次の書名がある。

『擬文』二冊(写本)、『琴山隨筆』一冊(写本)、『建議』一冊(写本)、『五苓散』一冊(写本)、『再春館学規会約刪定解』一冊(写本)、『診録』一冊(写本)、『聚毒編』一冊(写本)、『徐大椿傷寒論方弁』一冊(写本)、『陳嘉模藥歌性補遺』一冊(写本)、『読類聚方集覽』二冊(写本)、『扁鵲伝解』一冊(写本)、『漫遊記』一冊(写本)、『藥量考』一冊(写本)

また『肥後医育史補遺』には、このほかに次の書名がある。

『古方』、『原診館七則解』、『塾中雜記』、『診余漫録外編』、『痘訣』、『白酒』、『仏氏不可恐藥説』、『方極刪定』、『方法法略』、『藥徵考訂』、『藥徵続編附録』、『類聚方刪定』。

さらに『肥後文献改題』には、以上のほかに『医道ニ付き意見書』一冊(写本)、『琴学或問』二冊(写本)、『琴山遺文』一冊(刊本)、『琴山琴録』一冊(写本)、『琴山小隠』一冊(写本)、『孝子蒙求標題』一冊(写本)、『診集解』一冊(写本)、『神主考』六冊(写本)、『篤古印式』一冊(写本)、『村井見朴行状(先考復陽洞先生府君行状)』一冊(写本)、『蘭思琴所遺稿』一五冊(写本)、『類聚方証翼』一冊(写本)、『類聚方補遺』一冊(写本)がある。これらも村井家蔵書の中から記録されているものである。

五、村井蕉雪

蕉雪は琴山の長男である。明和六年(一七六九)十月十五日に生まれた。『肥後人名辞書』には、次のようにある。

名は烜、字は士陽、冠五と称し、蕉雪又は玉蟾と号す。琴山の長子にして、後ち藩医となり再春館医学監となる。人と為り卓抜世事を屑とせず、豪侠小事に拘はらず、又治療貴賤を撰ばず意に適せざれば行かず。常に琴書を弄び書画を樂と為す。最も山水四君子を善くす。明の王健章の画風を慕ひ一派を開く。肥後南宋画の祖なり。天保十二年(一八四一)十二月五日歿す。年七十三。墓は春日万日山。

蕉雪の人となりについては、『肥後藩画人名録』(『続肥後先哲偉蹟』巻八に収録)に次のようにある。

村井冠吾、名烜、字士陽、号蕉雪、藩医、椿寿長子、為人卓落、不屑世事、豪爽不拘小節、治療不撰貴賤、亦不適意、則雖貴招不行矣、居常玩琴書、入梅琴亭、撫古書画、煮茶插花、明窓淨几、興來揮灑、書画以為娛、尤善山水四君子、笈墨有古風、每愛西郊別莊之幽閑、日遊于其泉石、吟哦逍遙、後遂与其妻婢、隱居於此、号石田別業、又称叢桂園。

蕉雪の墓誌（『統肥後先哲偉蹟』卷八に収録）は池辺謙が撰している。それには次のようにある。

城西万日丘上、望之有石高四尺者、是吾友村井君墓也、君姓村井、名烜、字士陽、一字冠吾、号蕉雪、又号玉蟾、晚年有天大三鳳之号、藩良医琴山村井先生之長子也、村井氏世系、詳于君顯祖考復陽先生碑、故略焉、君天資磊落、風韻高邁、出于人表、講業之余、好詩画、其酒後揮毫也、劇談高笑、傍若無人、而坐賞嘆其墨妙、君惡時流之医風、不敢数權貴之門、然克繼父業也、寬政八年丙辰、賜拜謁、享和二年壬戌、奉命診瑤台夫人病、有絹及器物賜、文化九年壬申、奉命診日田鎮台三河氏病、十一年甲戌、琴山先生致仕、君賜廩米七十石、為外班医、文政三年庚申、諱了公老、好古書画、君上所藏之數幅、公悅賜八丈絹、八年乙酉、為再春館医学監、十一年戊子辭職、天保二年辛卯、奉命診長崎鎮台高本氏病、君以明和六年己丑十二月望生、天保十二年辛丑十二月五日、卒於石田別業、享年七十三、臨終神色不變、正坐自若云、凡忝隣国之招、診病者三十、医生受業于門者三百余人、晚年琉球医昌績者、亦遠致書列門下云、君娶武藤氏、無子、養弟玄齋為嗣、嫡孫同雲、小祥前來請曰、祖父也、子之旧識、敢煩墓誌、余聞之、感泣曰、余辱交數十年、以文之拙、可固辭子之請也、乃銘曾所概見以授之、銘曰、

万日之丘、神之所休、後喬松秀、前大海流、其宅安固、□□春秋

万日山の村井墓地にある蕉雪の墓石文には、正面に

蕉雪椰井先生之墓

裏面に

以明和六年乙丑十月望而生以天保十二年辛丑十二月五日而没享年七十有三

向かって左の面に

合葬武藤氏 弘化四年丁未八月二十日丁卯逝矣

とある。

『国書総目録』には、村井炬の著書として、『持脈輕重法』が収録されている。

琴山の時から始めた島崎町の別邸は、蕉雪の時に完成した。叢桂園、別名を石田別業という。蕉雪は最晩年をここで過ごした。叢桂園は現在は、熊本市の歴史公園となって公開されている。叢桂園の写真を図版1に示す。

六、村井白陽

白陽、村井玄斎は、琴山の次男で、安永二年（一七七三）九月七日に生まれた。したがって蕉雪の弟である。そして蕉雪の後を継いでいる。『肥後人名辞書』には次のようにある。

名は炳、玄斎と称す。椿寿（琴山）の二男なり。藩に仕へ侍医司となり、再春館へ所蔵の医書を献ぜり。嘉永元年（一八四八）二月十日歿す。年七十六。

『諸家先祖附』（『肥後先哲偉蹟』卷三に収録）には、次のようにある。

（琴山から）三代玄斎、白陽、実は椿寿（琴山）二男なり、御七、御擬作百石、御物頭列、五十石御加増

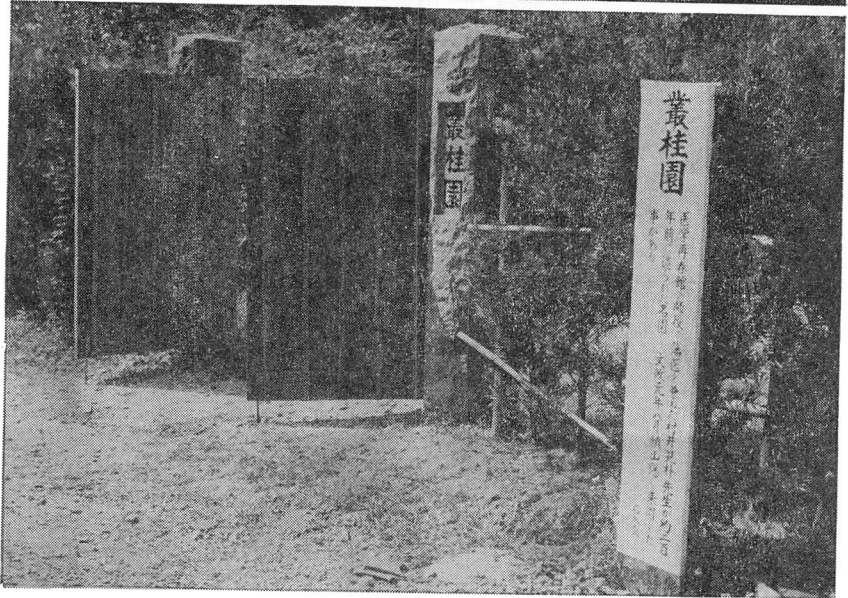
白陽の再春館における勤務は、次のようであった。

文化十三年（一八一六）六月〜文政八年（一八二五）二月 御医師触役

万日山の村井家墓地にある白陽の墓石文には、正面に

白陽村井先生之墓

裏面に



図版 1 叢 桂 園

以安永二癸巳九月七日而生以嘉永元年戊申二月十日而没享年七十有六
向かって左の面に

合葬沢田氏 文久三年癸亥三月二十五日辛未逝矣

とある。

七、村井翠溪

翠溪、同雲は文化十四年（一八一七）七月十五日に生まれ、文久二年（一八六二）八月七日に亡くなった。

『諸家先祖附』（『肥後先哲偉蹟』巻三に収録）には、ただ次のようにあるだけである。

（琴山から）四代同雲、翠溪

翠溪の再春館における勤務は、次のようであった。

弘化三年（一八四六）五月 句読師

文久元年（一八六一）八月より同年十二月 吟味副役

文久元年十二月より同二年（一八六二）八月 吟味本役

万日山の村井家墓地にある翠溪の墓石文には、正面に

翠溪邨井先生之墓

裏面に

以文化十四年丁丑七月望生以文久二年壬戌八月七日没享年四十有六

とある。

翠溪の著書は『肥後医育史』に、『傷寒論講録外伝』三冊（写本）、『翠溪隨筆』十二冊（写本）、『本論脈談』二冊（写本）、

『読名数解』一冊(写本)がある。

八、村井琴浦

琴浦、雲台は文政十年(一八二七)四月十一日の生まれで、明治三十六年(一九〇三)十一月八日に亡くなっている。
『諸家先祖附』(『肥後先哲偉蹟』卷三に収録)には

(琴山から)五代雲台、琴浦、実は弟なり

とある。

雲台の再春館における勤務は

慶応元年(一八六五)六月〜同二年(一八六六)(月は不明)吟味本役であった。

万日山の村井家墓地にある琴浦の墓石文には、正面に

琴浦邨井先生之墓

向かって左の面に

以文政十丁亥季四月十一日生以明治三十六年癸卯年十一月八日歿享年七十有七

とある。

九、村井凌雲

凌雲、同吉は翠溪の長男で、嘉永五年(一八五二)二月七日に生まれ、大正三年(一九一四)八月十日に亡くなった。

『諸家先祖附』(『肥後先哲偉蹟』卷三に収録)には、

六代同吉、実は同雲長子なり

とある。

万日山の村井家墓地にある凌雲の墓石文には、正面に

凌雲邨井先生之墓

向かって左の面に

嘉永五年壬子二月七日生大正三年甲寅八月十日没

とある。

十、村井家のその後

(一)村井蘇山

蘇山は見朴の第三子である。琴山の弟に当たるから、村井家は継がなかったが、やはり医者となり、若くして亡くなった。『肥後人名辞書』には、次のように記されている。

名は桂、藤伍と称す。見朴の三子なり。医を吉益東洞に学び令名あり。京都伏見に客死す。時に安永五年(一七七六)三月十七日。年三十四。

蘇山は明和七年(一七七〇)に、兄の琴山の『善音堂薬量考』を校定している。『国書総目録』に、村井桂として、『善音堂薬量考』校の書名がある。

(二)村井習静

習静は見朴の第四子であるから、琴山の弟にあたる。寛延三年(一七五〇)三月十一日に生まれた。

『肥後人名辞書』には次のようにある。

名は桃、字は蟠年、藤十郎と称し、習静と号す。琴山の弟にして別に家を興し、時習館句読師より訓導となる。禄百

石。後刑獄錢穀局監となり、又篤く道学を信じ、詩を善くす。著書十余卷あり。文政三年（一八二〇）十二月三日歿す。享年七十一。墓は春日万日山。

万日山の村井家墓地で、平成三年春に新設された習静の墓石文は、正面に
習静 郎井先生之墓

裏面に

復陽郎井見朴四男、字は蟠年、藤十郎又は桃寿と称し、別家を興した。

生於寛延三年三月十一日

歿於文政三年十二月三日

合葬平野氏

天保九年戊戌十月二十八日丙申逝

とある。

『国書総目録』には、『習静遺稿』がある。習静は分家して別に家を起こし、医学とは違う道歩いたので、『清風堂文稿』にある墓誌および『諸家先祖附』の資料は省略する。

(三) 村井家のその後

『肥後医育史補遺』に村井家の現代と記された矢之助の墓は、現在村井家墓地の北側南向きに、墓石がしつらえてあり、その墓石文には、正面に

陸軍少佐村井矢之助之墓

裏面に

鹿児島県東市来町湯之元牧野祐之助の次男として生まれ村井家の養子となった。

一九四五年黒河省長在任中、ソ連の対日参戦により応召、終戦後ソ連に抑留中、一九四八年カザフ共和国カラガンダ市郊外サリヨノフカ收容所にて客死

明治二十四年一月二十二日生

昭和二十三年十一月一日歿

享年五十九歳

とある。

今春改葬された墓地には、見朴の先代の知安、さらに知安が養子となった長松見栢の墓がそれぞれ新設され、見朴、琴山、蕉雪、白陽と並んで、その右に位置している。

見栢の墓石文は、正面に

邨井見栢処士之墓

裏面には

江 見栢。字容甫。称長松葬。

とある。

知安の墓石文には、正面に

容膝村井先生之墓

裏面には

本姓林田氏、字知安。諱能敦。

とある。

また今春新設された墓石の一つに、琴浦、雲台の次女の志津の墓がある。正面には

円寂院釈尼妙静慈徳大姉

裏面には

琴浦邸井雲台次女志津

八代凌雲邸井同吉歿後家督相続

明治五年十一月一日生

昭和二十年七月二日歿

とある。

見朴の父村井知安が医学を学んで熊本に出てから、家系を守って再春館とともに歩いて来た観がある村井家は、琴浦の次女志津を最後に幕を閉じた。

昭和四年刊行の『肥後医育史』の執筆にあたって、山崎正董は健在であったこの志津から調査上多くの便宜を与えられた。その結果、あの名著が完成したといっても過言ではない。あの当時、村井家に所蔵されていた歴大な資料は、太平洋戦争の戦災と、昭和二十八年の熊本市白川の大水害で、すべて失われたと聞いている。したがって、現在残されている資料は、すでに原資料ではなく、山崎正董が当時とった多数の記録のみとなっている。それらは熊本大学医学部内の肥後医育記念館に保存されている。

十一、結 語

村井家では、これまで見朴は別にして、琴山から代を数えており、『諸家先祖附』では、琴山の条に、冠吾、蕉雪を二代、玄斎、白陽を三代、同雲、翠溪を四代、雲台、琴浦を五代、同吉を六代と記している。

そして万日山にあった村井家の旧墓地では、見朴の墓だけが別に建てられていて、琴山以下は村井家墓地として周囲を

囲まれた区画の中に、琴山の墓を南向きの中央に置き、二代蕉雪の墓は西側で東向きというように、配置されていた。

それが平成三年春に全面的に改葬されて、現在は見事な墓地となっている。墓地の見取り図を図2に示す。また村井家墓地を図版2～5に示す。

ここでは知安が養子にいった長松見栢から始まり、同吉の没後家督を継いだ志津まで、医家一族を中心に、矢之助まで、および分家の村井習静とその嫡孫の貫山まで入っている。そして新しい碑文には次のようにある。

容膝邸并能敦は鞠池二十五公肥後守武包の次男林田左京亮能次より七世の裔として江戸時代初期木部の里に生まれ、医を修めて才を認められ江見栢の家に入婿し江氏の族姓邸井を名乗った。これが村井の初代である。歴世医を業とし、復陽、琴山、蕉雪の三代は肥後藩の再春館の教授として多くの門生を育成した。歴代医は仁なりと貧富の別なく診療を行い、国手邸井の盛名は西国一円に広まった。然し乍ら世の移り変わりと共に古医方は衰退し、八代目凌雲を以て医業を廃するに至った。容膝邸井能敦の子孫 祖先の冥福を祈り、埜域を改めたのを記念しこの碑を建立する。

平成三年 春

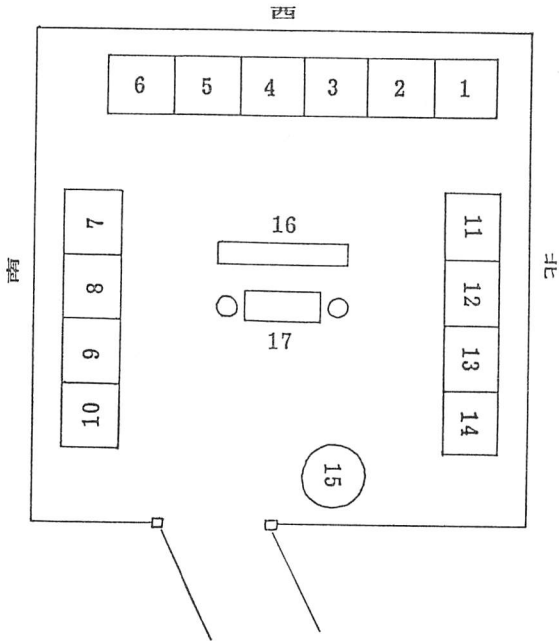
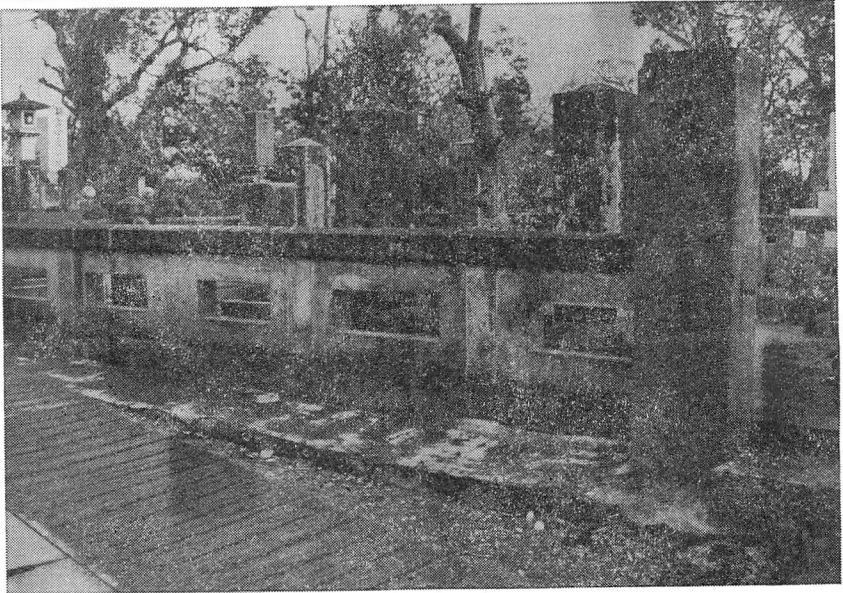
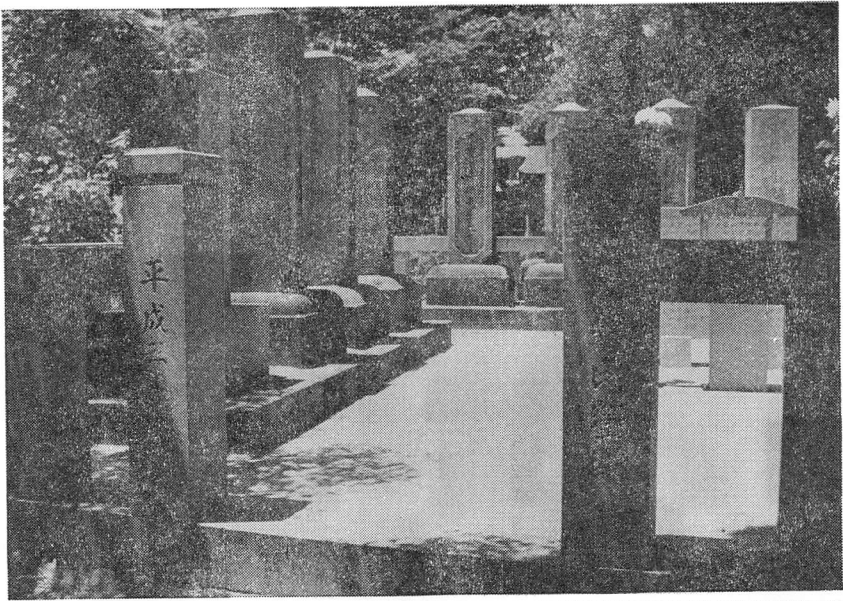


図 2 村井家墓地の見取り図

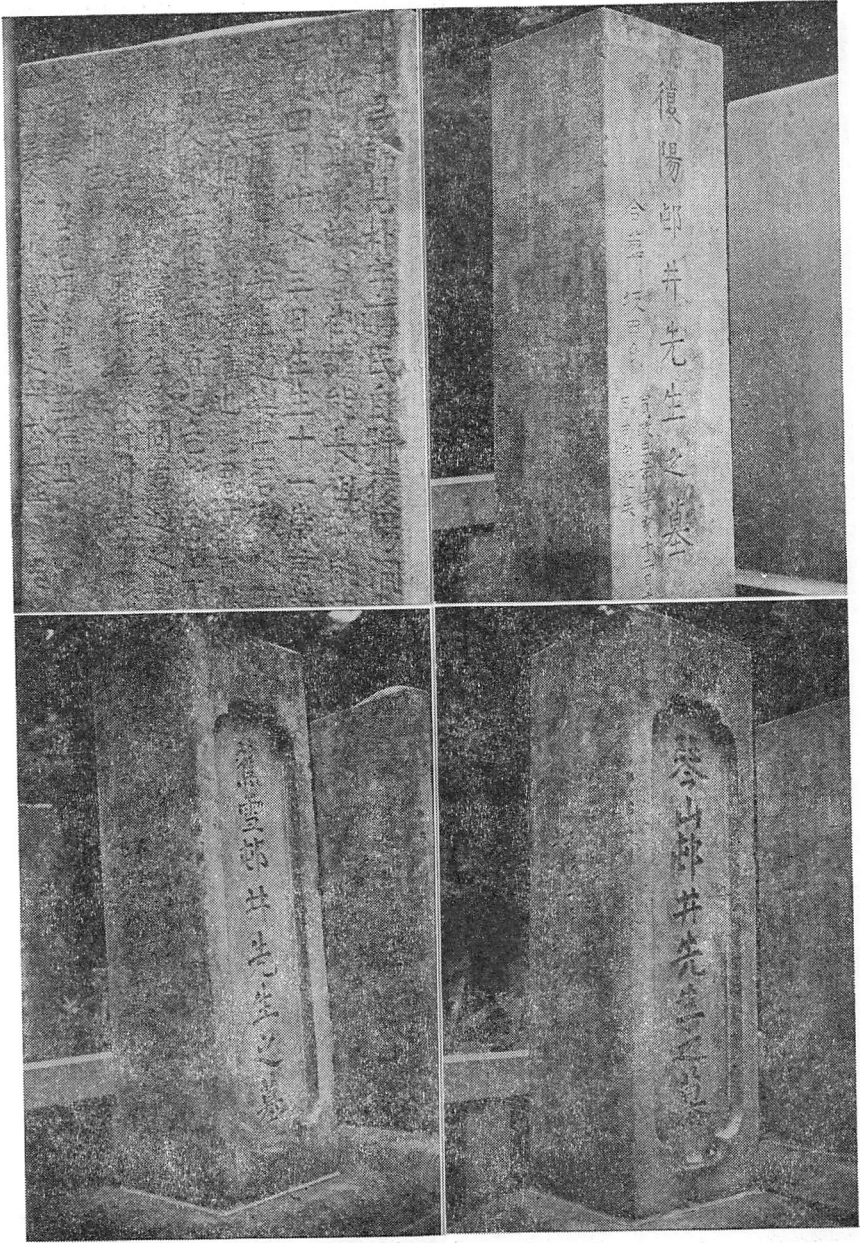
- 1：邨井見栢処士之墓 2：容膝村井先生之墓 3：復陽邨井先生之墓 4：琴山邨井先生之墓 5：蕉雪邨井先生之墓 6：白陽邨井先生之墓 7：翠溪邨井先生之墓 8：琴浦邨井先生之墓 9：凌雲邨井先生之墓 10：円寂院积尼妙静慈徳大姉 11：陸軍少佐村井矢之助之墓 12：村井氏歴世一族供養塔 13：習静邨井先生之墓 14：貫山邨井先生之墓 15：貫山先生墓道碑 16：村井氏塋域の碑文 17：香花供養の台



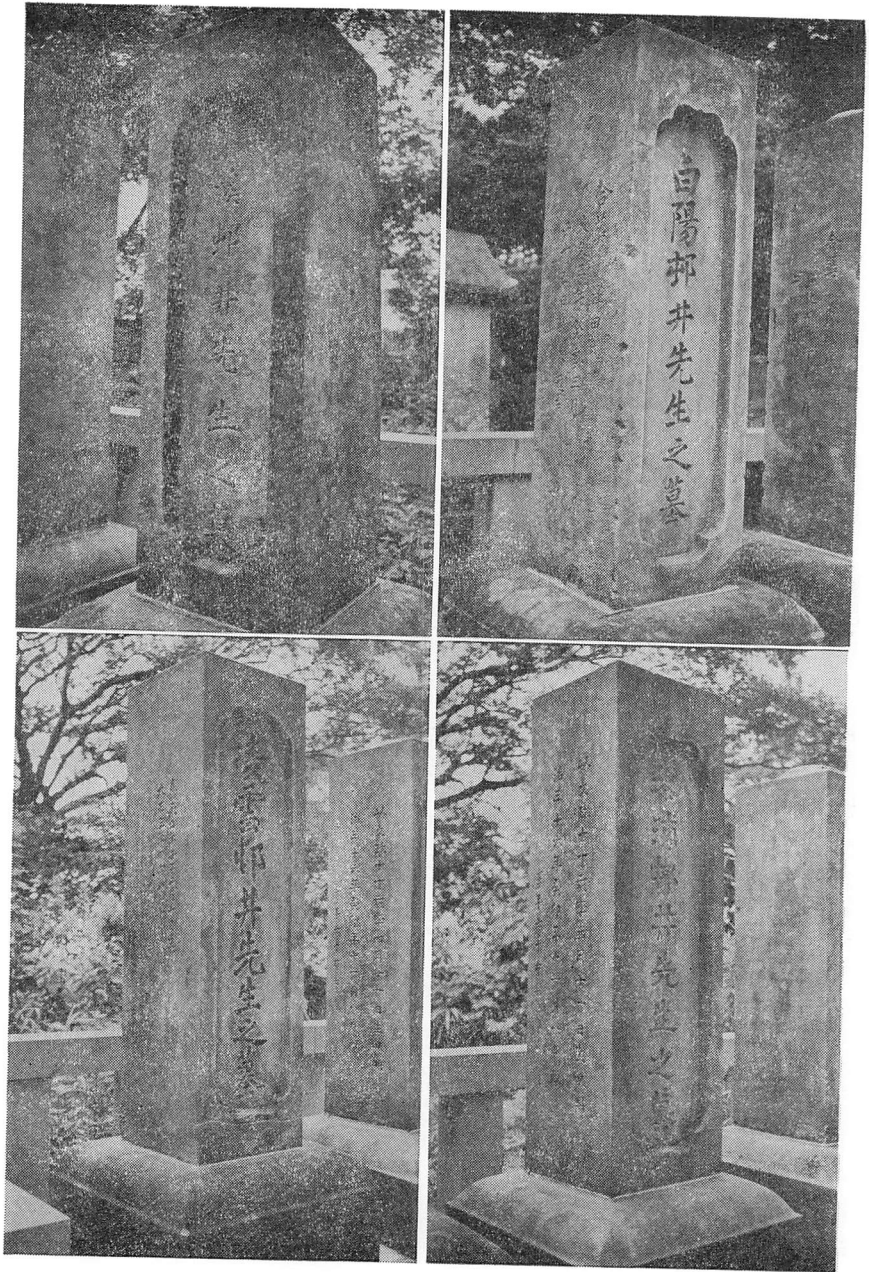
図版 2 村井家墓地（上：現在の墓地，下：旧墓地）



図版 3 村井家墓地（上：西側の六基，下：南側の四基）



図版 4 見朴（復陽），琴山蕉雲の墓石（上左：見朴の墓碑銘）



図版 5 白陽，翠溪，琴浦，凌雲の墓石

参考文献

- 市古貞次ほか七氏編集『日本文化総合年表』二八二頁、岩波書店、東京、一九九〇。
- 上野益三『年表日本博物学史』一八七頁、八坂書房、東京、一九八九。
- 上妻博之著、花岡興輝監修『新訂肥後文献解題』、河島書店、熊本、一九八八（昭和六十三年）。
- 角田政治『肥後人名辞書全』、青潮社、熊本、一九七三（昭和四十八年）復刻。（初版は昭和十一年）
- 山崎正董『肥後医育史』、鎮西医海時報社、熊本、一九二九（昭和四年）。
- 山崎正董『肥後医育史補遺』、鎮西医海時報社、熊本、一九三二（昭和六年）。
- 武藤殿男編『肥後先哲偉蹟正・続』（肥後文献叢書別巻一）、歴史図書社版、一九七一（昭和四十六年）復刻（初版の奥付なし）。
- 森末義彰、市古貞次、堤清二『国書総目録 著者別索引』八八五頁、岩波書店、東京、一九八二（昭和五十七年）。
- 浜田善利「熊本市の医薬および自然史関係史蹟」『薬史学雑誌』一七卷一号、四八～五三頁、一九八二（昭和五十七年）。
- 浜田善利「肥後村井家の叢桂园」『薬史学雑誌』二三卷一号、一九～二七頁、一九八八（昭和六十三年）。

（熊本工業大学）

Medical education and Murai family of doctors in Higo

by Toshiyuki HAMADA

The Murai family (村井家) was a family of doctors since the middle of the Edo period to the Meiji in Kumamoto. Tomoyasu Murai (村井知安) started as a doctor in Kumamoto-fu. Kemboku Murai (村井見朴) was Tomoyasu's eldest son. Kemboku was ordered to establish a public medical school, the so-called Saishun-kan (再春館), by the eighth lord of Kumamoto feudal clan, Sigekata Hosokawa (細川重賢).

The school was opened in 1756. Though Kemboku was blind at that time, his eldest son Kinzan (琴山) supported him in managing the school as a professor.

After Kemboku, Kinzan, Shosetsu (蕉雪), Kinzan's eldest son, Hakuyou (白陽), Shosetsu's brother, Suikei (翠溪), Kimpo (琴浦), Suikei's brother, and Ryouin (凌雲), Suikei's eldest son, were successive doctors of the Murais. Six doctors, from Kemboku to Kimpo, served the school.

The school was closed in 1870.